

2004年3月31日発行



Web版

## CONTENTS

---

平成16年2月22日に開催した土屋文明記念講演会の記録

■ 「青南の日々 父文明の思い出」

小市草子

群馬県立  
土屋文明記念文学館

# 文学館通信

土屋文明記念文学館報

2004年3月31日

発行／土屋文明記念文学館

〒370-3533 群馬郡群馬町保渡田 2000

電話 027-373-7721 FAX 027-373-7725

Vol 6

## 「青南の日々

### 父文明の思い出」

小市草子

皆さん、こんにちは。今日は皆さんにこうしてお会いできて大変嬉しく思っております。よろしくお願いいたします。

実は、昨年「ケノクニ」の内田一枝さんが『清流』について話してくださいまして、それによって一応疎開生活がけりになったわけでございます。この度、館の方からその疎開生活を切り上げて青山南町の家に戻ることができた、それからの日々について何か話すように、というお話があったのでございます。今もお話いただきましたけれども、私は『かぐのひとつみ』というつたない作文集を出しまして、父の思い出などをそこに書きましたもので、実は、「私はそこに思い出らしいものをみんな書いてしまって、もうそれ以上のものは何もないのですけれど」って申し上げたのです。そうしましたら、「いや、それはもう話が重なっても何でもいいから、ちょうど切れ目になるのだから来て話すように」と言っていたいただきました。私はもう年を取ってしまっておりませんが、主人に「い

い機会だし、普段お世話になっているのだからお礼のつもりで伺ったら」ということで勧められたものですから、大変危ぶみながらお受けした次第でございました。こんなに大勢の方にお集まりいただくなどと思いませんで、本当にありがたいことでございます。

記念館ができてから、父に関する講演とか展示とか、色々な形で年々に続けられておりますのを、私もは大変にありがたく感謝しております。そして、普段ご無沙汰しておりますが、今日はその東京に移り住むことができた昭和二十六年秋以降の生活について、思い出すことを二、三お話させていただきますと思っております。

自分の宣伝になりますけれども、ただいま申し上げました『かぐのひとつみ』というのは、本にして出しましたときにこちらの記念館の売店にも置いていただき、欲しい方に読んでいただいていたわけですが、それがすっかりもうなくなりましたので、それから私どもの手元にももうほとんどなくなりましたのです。皆さんが「読みたいけれどもないだろうか」というようなことをお尋ねになりますので、これでは、これを機会に増刷をしてみたら、ということを考えておりました。前の『かぐのひとつみ』という本は石川書房から出しましたのです。実はその石川書房の主人、それから奥さん、一所懸命本を作ってくださいったのですが、お二人とも続けて亡くなられました。増刷していただけたらと思いましたが「フ

イルムも何も取っていないので無理です」ということで、それでは…と思っておりますところ、思いがけなくこの度増し刷りをしていただくことになりました。そのお世話をくださったのが一茎書房の斎藤草子さん。今、こちらで「群馬県の歌人特別展」が行われていますが、この方はその中のおひとり斎藤喜博さんのご長女です。喜博さんは群馬の「ケノクニ」を創刊されて、教育の方でも大変活躍された方です。今日は草子さんがおいでくださって面倒を見てくださっています。

今申し上げました東京に移り住むことができた昭和二十六年秋以降の生活について、振り返ってみますとそれはもう四十年の長い時間になります。青南（せいなん）、青南というのは青山南町です。で青南。父が初めの歌集をつくり出す時に、青山南町に住んでいるということで『青南集』という名を付けました。それがずっと最後まで付いて回りました。最初の『青南集』の凡例、続けて『続青南集』の凡例を見ますと、「青南を名としたのは、青山南町（現在は南青山と改称）がこの集の全制作の地であり、さらに私の半生住居の地だからである」と記されています。最初の歌集を『青南集』にしようと思しました時に、父が「この次は続だよ。続青南集だよ。その次は続々だよ。その次は続続々。この分だったら幾らでも出せるね」と大変愉快そうに言ったのを思い出しますが、本当に『続青南集』、『続々青南集』、『青南後集』、そして亡くなってから『青南後集以後』という形で、



生前から合わせて五冊の歌集が残ったわけでございます。

それで、四十年間のことを振り返ってみますと、本当に長い時間で様々なことがあったわけですが、やはり私は父の残した歌集によってその四十年間を振り返っていくのが一番いいのではないかと、思い出せるのではないかと思います。今日は自分のメモのつもりで、覚書のつもりでコピーをお願いして、皆様のお手元に配っていただきました。「青南の日々（I）」の方をご覧いただくと、四十年間の父の残した仕事についてちよっと書き出してみましたのです。これはご承知くださっている

方も多いのですが、一番主な仕事は万葉研究と歌集です。

万葉研究は、集大成として『万葉集私注』を出しました。父は万葉集の注釈については非常に心を込めて臨んでおりました。というのは、父の先生の、伊藤左千夫先生が生前「ぜひ万葉集の注釈書を何とか出したい」という念願をお持ちになっていらしたのですが、「巻一」だけをお書きになって若くして亡くなれました。父はその後を受け継いで、どうしても左千夫先生の残された仕事を自分は生涯かけてやりたい、という悲願のようなものを持っていったのだと思います。

万葉集については、若い時から読んでおりましたので色々なものに書いております。そういうものを集めて研究を続けてまいりましたのですが、戦争中から『万葉集私注』についてはもう一所懸命やっております。戦争でなかなか思うようにいきませんでしたが、昭和三十一年に二十巻本——一巻一冊で二十冊になるのですが、それが完成いたしました。昭和三十一年の六月に出しました。これは二十四年の五月に第一巻を出しましたが、戦争中も疎開中も努力をして書き続けてきた仕事でございます。それが第一になりましたのですが、『万葉集私注』に関しては父は非常に情熱を注いでおりまして、結局、生涯三回『万葉集私注』の改訂版を出しました。

最後に出しましたのが昭和五十八年の二月。『万葉集私注』全十巻完結とありますが、そこ

で一応三度目の新装版が完結いたしました。その時、もう九十三歳になっていましたけれども、それでも父は「まだまだ万葉集に関しては幾らでもやることがあるよ。長生きできたらその改訂を続けていきたいな」と申しておりました。

これは私忘れられないのですが、もう本当の晩年になって、母もいなくなつてからのことだったと思います。書齋のソファに腰掛けて何か考え事をしていた父が、ふっと思いついたように「何か中学生が使うような単語のカードがあるだろう。あれを買ってきておいて貰いたいな」と私に頼みました。父はその単語のカードによって、やはりまだ整理したいもの、色々な事柄や言葉などがあつたのですね。とにかく、それをとりあえずカードにでも書き込んでおきたい、という気持ちだったと思います。私は、父はこんなになるまで万葉集のことについてまだまだやりたいと思つているのかと思つて、何か痛ましいような気持ちにさへなつたことがあります。その単語カードは、結局、父の亡くなつた後、父の机の上にそのまま残されておりました。

そんなことで、『万葉集私注』に関して、父の仕事というのは生涯を掛けた仕事だったと思います。が、東京の青山の家に移ってきました時に、父の大変気に入った書齋ができて、その書齋で一所懸命勉強いたしました。本当に『万葉集私注』には苦勞をいたしました。脇で見ている、青山に帰ってきてからの数年は——十数年でしょうか、

もう何をおいても『私注』のことを心に掛けていたと思います。

その、気に入った書齋で大変落ちついた気持ちで仕事をいたしました。その書齋をこの記念館で再現して下さって、今、私はまたその書齋を見ることができのです。書齋のドアを開けますと、本当に父がそこにゆったりとソファに掛けて、本を読んでいたりと、考へごとをしていたりして、「来たのかい」というようにこちらに顔を向ける、そんな気がしてなりません。この書齋は、青山の書齋をそのまま再現していただきありがたい記念のものになっております。



そんなふうには『万葉集私注』に大変心を入れて、そちらを第一にしていたものから、昭和二十六年に帰ってきたのですけれども、先ほど申し上げました『青南集』は、帰ってきてからの歌集として四十二年になって初めて出ました。父はもう七十七歳になっておりました。

『青南集』と同じ年に『続青南集』と、この時は二冊続けて出しました。これがこんなに遅れたのは、結局、『万葉集私注』の方に手が掛かって歌集まで手が届かなかったということがありました。それともう一つ、この『万葉集私注』には、言ってみましたら生活が掛かっておりましたのです。この『万葉集私注』を一巻ずつ仕上げていって、そして印税をいただくこと。生活を支えていかなければならない。戦後のまだまだ大変な時期でしたので、父はそういうことのためにも一所懸命にしたわけでございます。

そういうことで、『青南集』と『続青南集』は昭和四十二年に一緒に出されました。これはそれぞれ歌集としては割合に期間が短いのですが、二冊まとめて出したわけです。この『青南集』の時期、『続青南集』の時期ぐらまでは父は大変元気でございました。七十七歳の時ですから、もう七十代の終わりになるのですけれども大変元気で、張り切って『万葉集私注』の仕事と一緒に合わせて歌も一所懸命つくっておりました。

「青南の日々(Ⅱ)」の方を見ていただきますと、『青南集』の最初のところに「青山南町に帰り住

む」という歌があります。二十七年に五首ありますが、これを読みますと、それまでの疎開生活を切り上げて帰ってきた時の思いが、心情が大変よく出ていると思います。足掛け七年おりました川戸の生活には、やはり本当に心を残しておりました。この五首の歌から『青南集』が始まります。

そんなふうには川戸の生活には心を残しておりましたけれども、父はそういう時はいつもそうなのですが、環境が変われば変わった、そこで非常に前向きに考えていく人でした。それで、青山の生活も一所懸命やったわけでございます。

書齋で仕事をしていて、仕事に飽きたり、また仕事に疲れたりしますと、庭に出ました。川戸から帰ってきた時、父は東京の青山の家に自分の思うような庭を造りたいと思っておりました。それは、川戸の木や草を運んで、それを植えて川戸の生活を忘れないように、記念にという気持ちだったと思います。それで、庭造りをいたしました。

父はもともとそういう考えを持っていたのですけれども、庭を造っても外との境に高い塀を立てることをしなかったのですね。「塀は立てない。立てることはない」と言って、塀は立てないで、そこに低い四つ目垣を結ってもらいました。これは、その道を通る人が皆この庭を見てくれればいい、そういう気持ちだったと思います。

それで、その四つ目垣の元に小菊の苗を植えました。それからお茶の種を蒔きました。お茶の種を蒔いて、お茶を育てて、お茶の葉が育ちますと、

お茶の葉を摘んで——茶摘みをしたこともありま  
す。お茶摘みをして、それを蒸して、お茶を  
煎れて私たちにも飲ませる。そういう楽しみをい  
たしました。

それから、その四つ目垣がだめになりますと、  
今度は金網の少し高めのフェンスを立てました。  
それも目の粗い、ちよつと手が入るぐらいの粗い  
もので。というのは、やはり父はそこから声を掛  
けてくださる方に苗や花を分けてあげたかったの  
ですね。そういうことがよくありました。父が庭  
に出ておりますと、通る方がよく声を掛けて「こ  
の花は何ですか」とか色々お聞きになる。「少し苗  
をいただけませんか」とかおっしゃるものでは  
ら、父は大変喜んでいそいそとその花を切つてあ  
げたり、苗を掘つてあげたりして差し上げており  
ました。母が「植木のお友達にはとってもやさし  
くって親切なのよ」って父のことをちよつとおか  
しがっていたこともあります。

そんなふうには、庭も大変楽しんで色々造りま  
したので、その庭の草や木にも四十年の間には  
大変色々変遷がありました。移り変わりがあ  
りました。父が亡くなった時に残った庭、これは  
その草木をやはり記念館の方で移してくださいま  
して、父の庭のそれを伝えるために庭を造つてく  
ださいました。それがこちらの「方竹の庭」でご  
ざいます。本当に「方竹の庭」に移してもらった  
青山南町の庭の草や木は、こちらにまいりました  
ら空気がよろしいし、土もいいと思います。それ

から、群馬町の植木屋さんが面倒をよく見てくだ  
さるということ、とつても育ちがいいのですね。  
もう橙なんかすばらしい。ええ、もうすばらしい  
です。ほんとに年々にこの橙がなりまして、それ  
をまた館の方が電話で知らせてくださって、その  
上送ってくださるんです。本当にいつまでもこう  
いうことで父とのつながりを感じ、お世話になっ  
ているわけでございます。

それともう一つ、庭はそんなに広い土地ではな  
いのですけれども、父はできるだけそれをうまく  
使って鶏を飼いました。これも川戸時代の思い出  
に、ということだと思えます。それから、畑をつ  
くりました。「十坪の畑あり」というような歌を詠  
んでおりますけれども、畑をつくつて鋤で耕しま  
した。油菜とか体菜とか、それがまた父がとつ  
ても上手でよくできるものだから、皆さんが驚か  
れるのですね。お正月の油菜などは随分近所の方  
に分けて差し上げました。春の油菜の茎立などか  
くのがとても楽しみだったようです。

鶏（とり）は、初めは十五ばかりですが、なか  
なか立派な奮発した鶏小屋をつくりました。ちよ  
つと背の高い片屋根の鳥小屋にして、皆、冗談に  
「母屋より鶏小屋の方が立派ですね」なんて言っ  
たりしたのですが、とにかく父はそういうことで  
割に何か思い切ったことをするのです。いいもの  
を、自分の思うとおりのものをつくつてみたい、  
ということ。

そして、鶏を飼いました。鶏の歌が「青南の日々」

でございます。ここには私が今日お話をしたいな  
と思うこと、本当に数少ないのですが、それに關  
連した歌だけを出してみました。読み上げてとい  
うと時間が掛かりますので、皆さんでご覧になっ  
ていただきたいと思えます。あの頃まだ戦後で、  
色々生活が大変な時だったものですから、私など  
も卵を毎日取りに行つて、ころころと透き通っ  
たきれいな卵が転がってきてくれると本当に豊か  
な気持ちになりました。物の不自由な、物価の高  
い時期だったものだから、子供たちのためにも  
大変ありがたい収穫でした。十年、鶏を飼いまし  
た。その折々の鶏の歌などもなかなか心を引くも  
のがありますので、ご覧いただきたいと思えます。

私は父の家からすぐ近くに住んでおりまして、  
直線距離にしますと一〇〇メートルもない近いと  
ころで、私の家からちよつと坂を登ったところに  
父の家があつて、そしてお互いに家の明かりを認  
めることができました。そんな近くだったので、  
そういうわけで、何か用があるとすぐ呼ばれまし  
た。用がなくても、私は行きたくなると行つてお  
りました。急ぎの用などで呼んでおいて、父は「大  
邸宅だったらこのくらいは庭のうちだぞ」と言っ  
て、私を呼び寄せることを何とも思っておりませ  
んでした。我が家と同じに、私どもは出入りして  
おりました。

父の家の木戸口を目指して坂を登っていきます  
と、開け放した窓から父の声が聞こえてくること  
があります。元気な大きな声でした。入っていく

と、母が言うのです。「今言つてたところなのよ。私に向つて何か言つたつて何にもなりませんよ。出るべき所に出てちゃんと言わなければ」つて。少し興奮して大きな声で言つていたのは、言わば父の義憤なのです。父は世の中や政治に対する批判、そういったものを非常に厳しく持つておりました。人の行動や何かにしても、誠実な、本当に人間らしい生き方というものを大切に、そうでないものに対して非常に憤りを感じる人でした。そんなことを思い出します。そんなふうにして青南の日々が過ぎていきました。

『青南集』に詠まれた時代は六十代、六十代の後半までなのです。出したのは遅れましたが、後半なのです。それから『続青南集』。同じ年に続けて出しましたが七十代前半になります。この辺は、父はまだ非常に若々しくて精力的でよく仕事をしましたし、また庭の手入れとか鶏の世話とか、とても活動的でした。歌会も月々の歌会には必ず出ておりました。随分大勢になったこともありましたが、皆さんの詠草の前もつてコピーされたものを二度も三度もくり返し見て○をつけて予習をしておりました。前日までは雨でも、歌会の日は不思議とよい天気になるのです。お父さんは晴れ男だと家では言つておりました。

『続青南集』の最後の頃になると思います。昭和三十七年に心筋梗塞という今までやったことのない大病をいたしました。大変寒い時期でしたけれども、一朝にして心筋梗塞を起こして、すぐ入

院をいたしました。それから三ヶ月の間入院して静養いたしました。今まで元気だった、あんなに動いていた父が、ベッドでこんなにも思えるくらい主治医の先生の言われることをよく聞いて療養に努めました。本当に優等生というか、いい患者だったと思います。

その時に、父の歌に——「青南の日々(Ⅱ)」の(一)番です。これは『続青南集』の終わりの頃になります。が、「臆病にただ死を怖れし少年より我が生死観は殆ど進歩せず」という歌があります。これは「病みて」という題で、その時の歌です。父は生きることに加ひたすらで死を怖れている。

若い時のにも、少年で死を怖れたという歌がありますけれども、死を恐れ、生を大切にしたことだと思えます。

その後だったのでしようか、ある時ぬるま湯をつくつてほしいというので、私がうっかりお湯飲みを水を入れてお湯を足したのです。それで、ちょうどいい加減にして父に上げようとしたら、父が険しい顔をして、「そりや、湯灌のやり方だよ。それはだめだ。そういうことは止めなさいよ」と咎められました。そのとき父が「私が諏訪女学校に勤めていた時にね、掃除当番を見回っていたら——」諏訪は寒いですから冬は水が冷たいのです。ね。それで、生徒が冷たい水をバケツに汲んで、それにストープの上で沸かしたお湯を足して温かくして使っていたのだそうです。それを見て『だめだめ、それは湯灌のやり方だよ』と言つて、そ

の時も教えてやっただよ」と言つておりました。そういうことに対して父は大変神経質なのです。感じやすいというか神経質で、私はいつも、食後のお湯を飲む時でも思い出しておられます。

『続青南集』の頃まではそんなふうになんか元気でおりましたが、病気をいたしました。それでも、幸いその病気がよくなりました。その時にお医者様をしてらして父と大変親しくしていた方がお見舞いに来てくださつて、「先生、ご寿命ですよ。心筋梗塞というのは同じ部屋に医者がいても間に合わないことがある病気ですよ。」そういうふうにおっしゃいました。それを、父は何かとても嬉しそうに皆に話しておりました。父はその寿命を大変大事にしたのだと思います。そして、長生きをすることができたのだと思えます。

『続々青南集』になりますと、もう八十を越えて八十三歳の時になります。七十代の後半から八十代に掛けてです。年月で言いますと、昭和四十二年から四十八年の間。健康を取り戻して各地を旅行いたしました。この時は必ず母が付いていました。それまではほとんど一人で出掛けておりましたけれども、もし途中で自分の具合が悪くなつて周りの方たちに迷惑を掛けたら悪いからというので、母が付いて各地を旅行いたしました。

それで、地方にもまいました。歌集を見ますと、本当に旅行をしている時の方が多いのではないかと思うくらい、随分全国を旅行しております。それには地方の歌会や万葉の研究の、そのための

旅行も随分ありました。非常に足が丈夫でして、どこかに行くのを厭わない。そういう人でした。そして、いつも非常に前向きなのです。計画を非常に緻密に立てまして何日かの旅行に出掛けました。

八十代に掛けて足が弱くなってきても、地方の旅行にまいりましたけれども、東京の中も随分歩きました。「所々百首」とか——これは注文が来るのです。百首なんてとても自分からはつくれないのでしょけれど、総合雑誌などの注文が来るものですから、「それじゃ…」ということでも出掛けるわけです。東京の中でも、例えば「早稲田南町をたづねて」とか「小石川漫步吟」とか、そういう題の連作が『続々青南集』には幾つも出てまいります。足が弱ってきて都会を歩くのは大変だということ、あの頃まだ私の主人が車を使っておりましたものですから、車に乗ってもらってそういうところを回りました。

帰ってくるると主人が言うのです。「おじいちゃんのは、本当に何て言うか、実地主義だ」と言うのですね。実地主義、現場主義。「その場に行つて、目で確かめ、足で確かめなきゃだめな人だ。」早稲田南町などというのは、若い時に非常に苦労をして何度も下宿を移ったりしたところですよ。「こう行つたら豆腐屋があるはずだ」とか、その時は本当に一所懸命自分で捜すつもりで行つたそうです。それから、「小石川漫步吟」なども何度も行つておりますが、松本で職を辞めて、一人単身赴任して

上京した時に下宿をしていた上富坂の「いろは館」の跡なども訪ねました。そういうふうには、自分の通った跡をもう一度確かめるといふことなのでですね。

主人が帰ってきてそんな話をしますので、私はその時に思い出したことがありました。戦争は終わつておりましたけれども、九州旅行に川戸から連れていってもらったことがあるのです。あの頃の汽車はもう時間が掛かつて大変なものだったので、九州を巡っている時に、私は長い時間掛かるので疲れてしまひまして、ちよつと持つていった文庫本などを出してパラパラやつておりました。そうしましたら、しばらくして父が厳しい顔をして、私を脱みつけるようにして「窓を見なさい。窓を。本なんかいつだつて読める。どこでだつて読める」と言つて、怒られてしまったのです。それで、私は「はっ」と思つて、本当はもう飽きていたのですけれども、もう一度窓を見ました。そういたしましたら、川戸でつくつていた畑の感じと九州のその土地の畑の、何か畝のつくり方が、土の寄せ方が違うのですね。ああ、知らないでいた、と。そういうことにもちゃんと目を向けなければいけないのだなと思つて。その時の父のちよつと怖い顔が思い出されてくるのです。とにかく父と旅行をしますと、そういう、はつとするようなことが幾つもありました。それだけに何か自分が満足していくというか、満たされるような思いで、後に残るものがあつて楽しかつたと思ひます。

それから、『続々青南集』で歌われている歌の中には、年年の山中湖村の歌があります。これは富士山の麓の山中湖、兄が富士吉田市に勤めていた関係で国有の土地を貸出すという広告を見つけてまして、そこに土地を借りて、山中湖湖畔のちよつと籠坂峠の方に上がつていった林の中の、静かなところなのですが、そこに小さな小屋を建てました。そして、年年、父はそこで暑さを逃れて楽しむことを続けました。その小屋をつくつた時に「どうしようか。私は無文荘というのを考えているのだけれどね、文無しの方がこれをつくりましたということ、無文荘としようか」と言つておりましたが、ある日、庭に黄蘗（オウバク）という木があるのに気がつきまして、黄蘗（オウバク）は、黄木（オウボク）黄蘗（キハダ）です。皆様ご存知だと思いますが、黄蘗（キハダ）の木があるのを見つけて、「これは貴重な木だよ」と。それで、黄蘗（オウバク）について色々辞書などを引いて、私なども教えてもらいましたが、それじゃあ、黄木がいいと、黄木荘という名前にいたしました。

その黄木荘の夏は、父にとつても母にとつても大変心の休まる、体の休まる場所だつたと思ひます。夏になると、孫たちが何人も集まつてきます。あの頃はまだ小さくて、ヨチヨチ歩きから幼稚園ぐらい、やつと小学校に行くぐらいの子たちで、五、六人はいつも集まりました。そうすると、父は庭の食事をすぐに計画して、七輪を据えて、

その辺の木を集めさせて、それを燃して火を起こし、大鍋を置いて、あの頃安くて体にいいというマトンなど——羊ですね——たくさん買い込んできまして食事をいたしました。夏ですの、日が長くて、私どもは長時間何か楽しい食事をした覚えがあります。

父は子供をとて大事にしてくれまして、かわいがってくれました。子供たちがまだ赤ん坊というか、まだ歩けない頃はよく抱いてお守などもしてくれましたが、「子供っていいもんだね。かわいくって。」本当にかわいいというような顔をしてよく言っておりました。私たちにも「子供を育てることによって人間は浄化されるんだ。」そんなことを言ったこともあります。父はいつも何かまともにとりかかるとか、そういうふうな考えでものを見ていたと思います。

子供をかわいがってくれましたけれども、厳しい面もありました。ある時子供がズツクの靴の後ろを踏んで庭を跳びまわっていたのですね。そうしたら、子供には何も言わないで、私が呼びつけられて、「この履き方は何だ。こういうことはきちんとさせなきゃだめだよ。靴をちゃんと履かせる。一番大事なことでないか。学校の勉強なんかできなくていいんだよ。」そういう言い方で言われたことがあります。

そんな子供たちが集まるとにぎやかなものですが父は大変嬉しそうでした。林の中の道が気に入ってまして、毎日散歩をするのですね。杖をつ

いてゆつくりと歩いていくのです。あるとき父が散歩に出掛けますと、孫たちがぞろぞろと後を追いかけていきました。私は大勢行つたのでちょっと心配で後で行つてみましたら、ちょうど道が五又路になっているところがあるのですが、そこに父が立って、こちらを向いて両手を大きく広げて、子供たちが父の腕を抜けてどこかに出ていきそうになっているのを制止しているのです。父はそういう時大変要心屋で神経質で、自分の手から抜け出たどこか林の中に入つていつてしまつて迷子になつたら大変だと、はぐれてしまつたら大変だと、そういう思いがあつたらしいのです。私どもが後から行つて大騒ぎして子供たちを引き返させました。そんなこともありました。

『続々青南集』では、色々と楽しいことがありました。父にとっては大変忙しい時期ではあつたかもしれませんが、その辺までは本当に安穩なところか、穏やかな日々だつたと思います。庭にも池をつくつたり、フレームを置いたり、それから一坪温室なんかを置いて、「ここに極まる我が奢りあり」などと言つて、大変満足な毎日だつたと思います。

それでも、この頃から「此所をしも終の住処と思へればめぐり立つビルも煩とせず」というようなことを言つております。四十八年ですから、父はもう八十三になつておりました。

そして、『青南後集』になりますと、これは父の最後の時期になるわけですが、父にとって大変大

きな悲しみに遭うことになりました。昭和四十九年、兄の死があります。兄、夏実は「自分のもの考え方は父によつて方向付けられてきた」と常々言つておりました。父も兄の色々な考え方に大変うなずくこともあるらしくて、兄が上京して家に来ますと話が尽きないようでした。私には大変仲のいい親子に見えました。父はそんな兄を心の中では頼みにしていたと思いますが、昭和四十九年、半年の病氣療養で、若い時に結核をした、その身を持ちこたえることができなくて、癌で亡くなりました。まだ五十一だつたものですから、父にとつては非常な嘆きだつたと思います。

歌集を見ますと、その父の嘆き悲しむ歌が数多くあります。兄の亡くなつた翌年に「悲しきの最も悲しきにあふともよ堪へむ過ぎ来し窮乏のあり」、また「堪へて生くることを究極のより処と長き命を保ちし思ほゆ」という歌をつくつております。父が若い時から非常に苦勞をして自分の道を進んできたということは、よく色々なことから私も推し量つておりましたけれども、こういう気持ちがあつてこの悲しみに堪えたのだと思います。それは、『青南後集』の昭和四十九年から五十年、五十一年頃の歌に現わされていると思います。

兄はいなくなりましたけれども、まだ母がおりました。「拙く生きいよいよ氣弱なる老一人なほ四年の道づれ頼まむ。」これは九十一になつた新年の歌になつておりますが、この時は五十六年。母が五十七年に亡くなつておりますので、父にはも



う何か母が少し元気がなくなってきた感じが心に掛かっていたのではないかと思います。それでも元気でいたわけですから、昭和五十七年の四月に母が亡くなりました。兄が亡くなった時も父は非常に口数の少ない——もともと口数は多くなかったのですが、この時もやはり黙すことが多くて、何か悲しみに堪えているという表情、いつもそういう表情でした。

ですから、私などはなまじつか兄のことを口に出しては言えなかった。そういう気持ちです。父の方から何か言い出した時に受け答えをすることはありまして、こちらから父のその気持ちに障ることはとてできない。そういう思いでした。

母が亡くなった時も、やはり同じ大変静かな状態、気持ちを覚えておりました。心の中を本当に見せることのない人でしたが、やはりそれは堪えていたのだと思います。兄の時に堪えた、その思いがまたここで父には蘇ってきたのだと思います。ただ一度こういうことがありました。父の傍で私も姉妹が母のことなど色々思い出して話し合っていたのですが——父がひとこと「寝たきりでもいいから生きていてくれたらね」と申しました。ひと朝にあつという間に母にいかれてしまった父の心からの思いだったと思います。

そういうことで、私は思い出すことがあるのですけれども、母が亡くなった年に、ちょうど四月に亡くなりまして、それからしばらく静かにしておりましたが、段々暑くなってきましたので、私

はその暑さを見計らって山中湖に一緒に行つて暮らしたいと思いました。夏になったら早速父を誘つて、父と一緒に皆で過ごしましょうと言つておりました。そして、暑くなりましたので、あるとき父に、「山中湖のあの涼しいところでゆっくりしてきましょうよ」と申しましたが、「うーん、まだ早いよ。まだ行かないよ」、その時はそう申しました。しばらくして「こんなに暑くなったのじやとても大変ですよ。行きましょう」とまた誘いに行きました時、「私は行かない。一人で行つてもつまらないよ」と申しました。私はそれまで父があんなに喜んでいた山中湖の林の中の朝夕を、これでもう本当に一切行かないつもりなのかと思つて、しばらく父の気持ちの変わるのを待ったのですが、それからは一切行こうと言いませんでしたし、私どもが誘つても首を縦に振りませんでした。母との朝夕を思い出すことが堪えられなかったのだと思います。

それから、ある時父が同期の方たちのクラス会があつて行ったことがあります。その時に、帰ってきて色々そのクラス会に集まった方たちの話をいたしましたのですが、やはり奥様を亡くされて、お嬢さんのところに一緒に暮らしている方がその中にいらして、その方なども話をしたらいいのです。そうしましたら、「何々さんは『親切な下宿屋にいるようなものですよ』って言っていたよ」って、少し笑いながら私どもに言いました。お嬢さんと一緒にとてもゆつたりと、何の心配もなく

暮らしていらした方なのですが、その方がそうおっしゃったそうです。親切な下宿屋さん。ああ、そうなのか。父もそう思っていたのだ。口にこそ出しません。母が亡くなった後も、父はどんなに耐え忍んでいるのかと思いましたが、口には出しません。毎日の日常のことで私どもと色々交渉があったわけなのですが、それでも本当に親切な下宿屋さん、その方が言ったのと同じ気持ちが父にはあるんだなと思つて、いくら私たちが尽くしてもダメなのだなあ、父は毎日何の不足もないように穏やかに過ごしているけれどと心つくづく思つたものです。

そんなことがあつて、父の最後の時期の毎日、やはり何といつても寂しかったのだと思います。それでも、歌をつくることと万葉集の研究に心を向けることと、そういうことがあつて、父はいつもそれを心に掛けていたのだと思います。

その四十年間に、父は先人の方たち、特に「アララギ」の先人の方たちを偲ぶ歌をたくさんつくつております。その方たちの忌歌会などにも、地方で遠いところであつても必ず伺つております。そういうふうになつた方たちを偲ぶ機会を大変大切にしております。それだけでなく、これは主に「アララギ」の会員の方ですが、亡くなった方たちのご遺族が遺歌集を出したいというので、父のところの色々と「序文を書いてもらいたい」、「序歌をいただけたら」と言つてこられました。何年もの間には随分たくさんの方が言つてこ

られたんですが、そのとき父はしみじみ言っておりました。「長生きをして生き残った者の務めだよ」と。そう言って、できるだけその遺族の方の満足の行くようにお応えしておりました。

今、その歌集は私どもが預かっているのですが、そうですね、数十冊になります。背表紙に書かれた名前を、ああ、この方、この方と思つて見ますと、父が序文を書いてさしあげたり、跋を書いたり、序歌をさしあげたりしている方たちです。父はそういうふうになつた方たちに対しては大変思い深いものを持っておりました。そして、そういう方たちについて、一人ずつの思い出やその方々の歌のことや、よく話しておりました。

それから、もうひとつ、これは皆様にお聞きいただきたいのですが、父はこの保渡田で生まれ、ある時期井出で育てられ、このふるさとを大変に懐かしく思つておりました。歌集を見ますと、ふるさとを思う歌、「思いて」という歌がたくさんあるのです。もう本当に挙げられないくらいたくさんございます。若い時からずっと、青南の日々になつてからも随分あります。

例えば、これは兄も母も亡くなった後ですが、「此の空の下にふるさとの山河ありかえり見ることなきふる里恋し」。昭和六十二年です。「誰があり誰が亡きかの音づれも絶えて乏しきふるさととなりぬ」という歌、ここで二首だけあげたのですが、父の晩年の、もう本当に最晩年の歌に「忘れゆく 思い出の中 ある時は 生き生きとしたる

山の姿あり」、(湖(うみ)の上を争いさかまきゆきし白雲相馬ヶ岳を包まむとする」という歌が、歌集の最後の連作としてあります。今日もこちらに伺うときに見ましたら、相馬ヶ岳がきれいに見えました。はじめ曇つていて見えなかったのが、車をこちらに向けて走らせている時、榛名山の稜線が見えて来て、一番高く相馬ヶ岳がそびえておりました。父にとってはこのふるさとの山々、特に榛名の連山、これは本当に生涯忘れることのない山だった山だと思います。

それともう一つ、こちらの記念館にも置いていただいているのですが、皆様にお話しておきたい『土屋文明書簡集』というのがあります。これは、今日もこちらにお見えくださっていると思うのですが、「ケノクニ」の堀江厚一さんが大変骨を折つてくださつて、父の書簡、皆様にさし上げた書簡を集めて書簡集として出したものです。父の昔からの、青南の日々もちろん、その日常を知ることのできる貴重な資料だと思つております。本当に親しい方に対しては、父は生の声をぶつつけて便りをして、父の人間というか人柄というか、そういうものが何の意識もなくその人に対して呼びかけたものだと思います。殊に、大正の年代から親しくしていただき万葉研究の上でとりわけお世話になつた歌の友、奈良の上村孫作さんとの書簡は貴重なもので、父の生涯での最後の歌となつた上村さんを悼む挽歌と共に忘れられないものです。そういうことで、父を思い出す色々な資料、こ

ういうものは皆様のおかげで貴重な資料として残っているわけで、今日は色々な思いを込めてこちらに伺いました。

そして、皆様が大変大勢集まつてくださるというのを伺つておりましたのですが、それに応えるだけのお話ができるかどうか、私は危ぶみながらまいりました。取留めのない話をいたしまして申し訳なかつたと思うのですが、本当に父の一面、父についてはもつともつと色々思い出してお話したいことがありますのです。私の妹が——父とこの妹は父の晩年を一緒に青山南町の家で暮らしておりました。そして、今は岡山の方に移つて暮らしております。父が植木好きだったものですからよく手伝わされました、いつの間にか苗木の育て方とか、デンドロビウムを鉢植えにして花を咲かせる、そんなことを色々覚えまして、岡山に行つてもそれを唯一の楽しみにやっているらしいのです。お互いに遠いものですから、なかなか行つたり来たりできませんで、時々電話をくれます。「東京から持つて来て植えた草や木がこうなのよ。お父さんがしていたように、こうなのよ」とか、話すのです。色々それからそれへと父の元氣だった頃の話が出てくるのですが、最後はいつもふたりで「懐かしい人ね」と言い合つて電話を切ります。本当に懐かしい人です。何て申しませうか、その折その折に忘れることができないことがたくさんあります。私も大変年を取りまして父の年を取つた時の気持ちがか——それでもまだ



まだわかりません。父は百歳まで生きましたので  
すから。百歳にならなければその百歳の気持ちは  
わからないと思います。私もやつと八十、やつと  
じやなくて、もう八十になってしまいました。こ  
の前——平成八年でしたか、文化協議会でお招き  
いただいたこの場で、父のことについてお話し  
たことがありますが、そんなことで大変記念館と  
のご縁というものを深く感じております。いい機  
会を与えていただきまして、父を色々と思ひ出す、  
良き折りであったと感謝しております。大変取留  
めのない話をお聞きいただきましてありがとうございます  
ございました。

(拍手)

何か、私がお答えできるようなことがございま  
したらおっしゃってください。

質問

草子（かやこ）さんというのは大変珍しいお名  
前ですが、どういうことからそのお名前をつけた  
のですか？

小市氏

先ほどお話いたしました、私の文集をまたつく  
ってくださいました一荃書房の斎藤さんも斎藤草子さ  
んとおっしゃるのです。全く同じ字なのです。  
私の方がもちろん年上ですので、お手本らしいの  
です。私が第一号で——一代というのでしょうか、  
一号というのでしょうか、次々に全国に何人もい  
らっしゃるのです。と申しますのは、「草」という  
字を書いて「かや」と読むのは大変珍しい読み方  
でございますよね。これは父が万葉集から取って  
つけた名前なのですが、「吾が背子は刈廬つくらす  
草（かや）なくば 小松が下の草（かや）を刈ら  
さね」という歌で、「草」という字を「かや」とよ  
ませております。

私は古い生まれで大正十二年なのですが、昭和  
ぐらいになってから次々にアララギの会員の方な  
どでお嬢さんの生まれた方が「草子」とお付けに  
なったんですね。それで、私が第一号、次はどな  
たか、斎藤草子さん、それから、今日、松本さん、  
お見えになってらっしゃいますでしょうか。松本

さんのお嬢さんも草子さんとおっしゃるのですね。

私は誇りに思うくらいいい名前だと思っ  
ているのです。ただ、学校に上がった時に絶対に「かや  
こ」と読んでいただけなかったのです。「そうこ」  
さんならまだいいのですけれども「くさこ」さん。  
「私、臭くないんだけど」と言ったことがありま  
すけれども、「草」と書いて「かや」と読むこの字  
を選んでくれた父を有難いと思っております。

私の亡くなった兄は夏実（なつみ）というので  
す。「夏」という字に「実る」です。これは吉野に  
夏実の川（菜摘の川）というのがあるのです。「吉  
野なる夏実の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山影にし  
て」という万葉集の歌からやはり取ったのです。

私どもは兄妹四人なのですけれども、母が言っ  
ておりました。「二人目までは、お父さん、一所懸  
命考えたけれど、夏実に草子に万葉集を熱心に練  
って考えたのよ。だけど、あとの二人はもう面倒  
くさくなっちゃって、三番目はうめ子」というの  
は、二月十五日の生まれなものですから、「白梅の  
すがしかれとの父の願いぞ」と。それから、四番  
目は「静子」。また、もっと平凡。これは斎藤茂  
吉先生が付けてくださったのです。斎藤茂吉先生  
にお願ひしたら、茂吉先生も頼まれてご迷惑だっ  
たことと思ひますが、「和歌子、歌子、静子みなよ  
き名前」と書いてくださったそうです。「和歌子、  
歌子じゃつきすぎてかわいそうだから」とって、そ  
んなことで、結局、平凡なのですけれども「静子」  
と付けた、と母が言っております。

司会

他にないでしょうか。それでは、私の方から。

よくお客様から聞かれるのですが、文明さんのお墓は埼玉県の、いわゆる「比企の岡」と言われる都幾川村にあるのですけれども、何であんな不便な所へ、ということなのですが、その辺はいかがでしょうか。

小市氏

「不便な所だから決めたんだよ」って父は言っておりました。「誰にも来てもらいたくないから。」ところが、あの不便な山を登って、皆さんが大勢いらしてくださるそうで、慈光寺の住職さん方もとても感動して、「今日はこういう方がお墓参りに来てくださいました。この方がおみえになりました」と、土屋の帳簿を作っておいてくださいます。土屋の墓をお参りしてくださる方にお名前を書いていただいて、その都度コピーして送ってくださいているのです。ですから、私、お一人お一人にお札を差し上げてないかと思えますけれども、とても感謝しております。本当にあんな不便なところによくおいでくださると思ひまして。

私どもと親しくしている方がいらしたのですが、その方がやっぱり慈光寺に「いいところだそうだから」と言って墓地を決めようと思っていられしたのだそうです。そうしましたら、息子さんに「こんな不便なところに決めることないだろう」って

怒られて、山を下った下の、何か公園墓地のようなどころをお決めになった、という話です。

父はとても気に入ったようでした。静かだ、と。

それと、もう一つ、住職さんが、何と云うか、非常に世俗的でなく飄々としている、欲のない感じの方で、そんなことも気に入ったのだと思います。

慈光寺に決めるということ自体、もともと父は万葉の研究で、イワイズラという植物があるのではないかというので、随分あの辺を歩いているのです。ある時、車で慈光寺まで行ったこともあるそうです。そのとき見ておりましたのです。そんなことが随分前にあったのですが、埼玉県の大宮の近くに住む方で、それを知った方が「今度、慈光寺で墓地を売り出すそうですよ」ということを教えてくださったのです。それで、父の心が大変動いたのですね。慈光寺という自分の歩いたところの縁、と。それで、とにかく行ってみたい。

兄が亡くなった時まだ私どもの家には墓所というものがありませんで、兄は京都で亡くなりましたので、京都のお墓に臨時にお願いしてあったのです。そうしましたら、母が、自分ももう年を取ってきていたものから、自分より先に死なれた兄と「何とか一緒のお墓に入りたい」と言い出したのですね。そのころ慈光寺の墓地を売り出すという話を聞いたものですから、「じゃあ、来春、行ってみようよ」と言って、父が母と約束をしてあったのです。

ところが、その春、四月、それを待たないで母

は亡くなりました。それでも、母の願っていたことはその通りになったのだと思って、私どもは慰められております。

司会

ありがとうございます。他にないでしょうか。それでは、ちょうど時間となりましたので、この辺で小市草子さんの講演を終わらせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

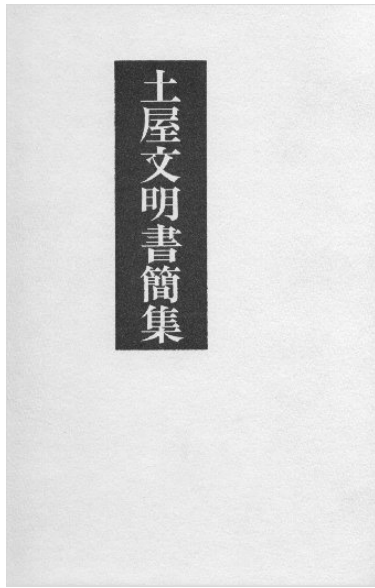
小市氏

長い時間、本当に取留めもない話をお聞きくださいましてありがとうございます。お礼申し上げます。

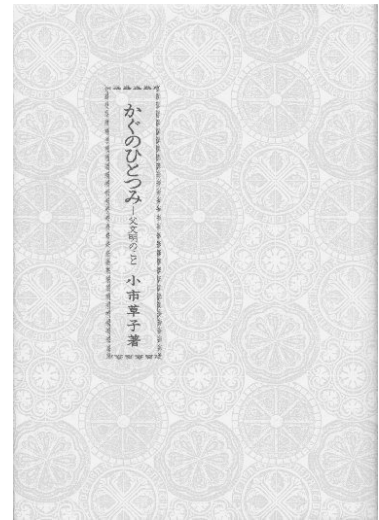
—了—

(平成十六年二月二十二日に当館で開催された土屋文明記念講演会の記録です。)





『土屋文明書簡集』



『かぐのひとつみー父文明のこと』

講演会配布資料

青南の日々 ( I )

昭和					
26	1951	11/24	青山南町5丁目50番地に帰住		61歳
31	1956	6/30	「万葉集私注」20巻本刊 (24年5/30 第一巻刊)		
④②	1967	11/12	青南集 (1355首) 昭27~昭35		
ㄥ	〃	11/25	続青南集 (1413首) 昭36~昭41		
44	1969	6/10	「万葉集私注」再刊 (補巻を付し10冊本)		
④⑧	1973	7/30	続々青南集 (1290首) 昭42~昭47		
51	1976	3/5	「万葉集私注」新訂版刊		
55	1980	3/24	「万葉集年表」第二版 (昭和7年4/24 初版刊)		
58	1983	2/20	新装版「万葉集私注」全10冊完結		
⑤⑨	1984	7/20	青南後集 (1285首) 昭48~昭58		
平成					
2	1990	12/8	没		100歳
③	1991	8/1	青南後集以後 (591首) 昭59~平成2 (5934首)		

青南の日々（Ⅱ）

青南集

27年

28年

8	7	6	5	4	3	2	1
鶏を見草を見る	今日も亦読めぬ一句に突きあたり幾度も出て	鶏十五に減りゆくさまも見つ老すこやかに 年を越えたり	空をゆくほほじろ叫びおびえ立つ庭鳥十五 わが友にして	霜消ゆれば出でて焼けたる瓦拾ふ東京第二層に 何時までか住む	なほ一人の土屋が山に残り居て落葉の坂を 行くかともまどふ	移り来にけり	六年耕すくぬぎが下の菜畑にかれ葉のこして わびしくぞ居る
15	14	13	12	11	11	10	9

続青南集

30年

31年

36年

37年

煙十歩我が世の驕り菜を植ゑて四種類の菜ども 相競ひ立つ（私注園昨今）	鉄ペンも得難き時に書き始め錆びしペンの感覚 今に残れり（私注稿了）	卵うまずなりて残れる鶏は四羽老いの新年 われと共にせむ	臆病にただ死を恐れし少年より我が生死観は 殆ど進歩せず（病みて）	彼の国の旅のつれづれより親しみて命を惜しみ いま煙草絶つ	何気なくまた或時は楽しみてここに喫ひし翁 今日よりは見ず（禁煙の歌）	十年に幾代りせし鶏なるかひよこの育つ よろこびも見き
---------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------	---------------------------------------	-------------------------------



56年	54年	55年	53年	52年	51年	50年
37	36	35	34	33	32	31
拙く生きいよいよ気弱なる老一人なほ四五年度の 連づれ頼まむ(九十一新年)	夕早く腹減れば食ふ物飲む物あり今日四月十日 七十年(四月十日七十年) 5首	命あり万葉集年表再刊す命なりけり 今日の再刊(万葉集年表第二版) 5首	我が歩みかくの如きか骨折りし五十年前の誤に 逢着す数々(万葉集年表第二版の為) 5首	堪へて生くることを究極のより処と長き命を 保ちし思ほゆ(寒きより温き日に)	三度版になるを喜び三度向ふ三度にして なほ飽き足らぬもの(万葉集私注新訂版)	悲しきの最も悲しきにあふともよ堪へむ過ぎ来し 窮乏のあり(友の形見其の他)
	60年	以後 青南後集	58年			57年
43	42		41	40	39	38
我等一生最も長きこの青山いくらか安らぎて 妻の終へしや(十二月) 5首	えにしあり南青山と呼ぶところ我が世のなかば 住みて留まる(南青山六十年) 14首		人なくて心の残るといふことも老い衰ふる 日に日に思ふ(亡き者を心に) 40首	終わりになき時に入らむに束の間の後前ありや 有りてかなしむ(束の間の後前) 10首	さまざまの七十年すごし今は見る最もうつくしき 汝を柩に	亡き児と共にと漏らしし一言に斂めむ山を 定めまどふなり(比企の岡を) 5首



	平成元年	平成二年		平成元年		62年
	46	48	47	46	45	44
	木の葉日に日に衰へ見するに向ひ居て誰にか告げむ このさびしさを	わが植ゑしくるみの下に生きつぎて喜び悲しみ 長くなりたり(一月)	老いて知るこのさびしさを語らはむ友は次々 先立ちてゆく(幼少老耄に至る) 14首	木が葉日に日に衰へ見するに向ひ居て誰にか告げむ このさびしさを	誰があり誰が亡きかの音づれも絶へて乏しき ふるさととなりぬ(故郷を思ふ) 14首	此の空の下にふるさとの山河ありかえり見ることなき ふる里恋し
		忘れゆく思ひ出の中ある時は生き生きとしたる 山の姿あり				
		湖の上を争ひさかまきゆきし白雲相馬ヶ岳を 包まむとする(八月)				



	52	51
	相共に九十年をめざしつつ早くも君は たふれ給ふか(九月 上村孫作遺歌集を見て)	ありし日はおろそかに過ぎすこと多くああとこしへに 会ふなき我が君(一月) 5首